

動的述語のシタの二義性について

著者	井上 優
雑誌名	国立国語研究所論集
号	1
ページ	21-34
発行年	2011-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000474

動的述語のシタの二義性について

井上 優

麗澤大学

国立国語研究所 言語対照研究系 [-2011.03]

要旨

日本語のシタは、完成相過去を表す場合とパーフェクト相現在を表す場合があると言われることがある。その際、「シターシナカッタ」、「シターシテイナイ」という対応する否定形式の違いが根拠とされる。しかし、この見方は次の理由で適切ではない。(1) パーフェクト相現在を表すとされる「シタ」の意味はパーフェクト相現在を表す「シテイル」と異なる。(2) 対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算するのは妥当ではない。(3) 「シターシテイナイ」という対応は、肯定形式と否定形式が文脈上対をなす見かけ上の対立にすぎない。(4) 「シターシテイナイ」という対応は、シタの動的叙述性（出来事全体をその前後を含む時間の流れの中に位置づけるという意味的性質）の強さの反映であり、シタのパーフェクト性の反映ではない。シタは発話時以前における出来事の実現を表し、シタの二義性とされるものは、出来事実現の有無を述べるか、出来事実現のタイミングを述べるかという文レベルの意味の違いである*。

キーワード：パーフェクト、完成相、シタ、シテイル、動的叙述性

1. 問題：主節のシタは二義的か？

鈴木（1979: 40-53）は、一回的な過去の出来事を叙述する動的述語のシタ（以下「シタ」をこの意味で用いる）の用法を次のように分類している。

I 現在とむすびついた過去（パーフェクト的）

- a 発言の直前の動きや変化
 - (1) a. あ、電気がきえた！ (鈴木 1979: 43)
 - b. あ、一塁ランナー走りました！……盗塁成功です。 (同: 44)
 - b 現在の状態に結果が残っている過去の変化
 - (2) a. 大きくなったね。外であってもちょっと解らないくらいだ。
 - b. 泰山木の花がさいたよ。みてごらん。 (以上、鈴木 1979: 46)
 - c 現在すでに実現済みであること
 - (3) a. 「御飯は？」「もう済みました」（暗夜行路）
 - b. 「やっと起きたね」下から大きな信行の声がした。（暗夜行路）
- (以上、鈴木 1979: 48)

* 本論は、国語学会（現在日本語学会）2001年度春季大会（2001年5月20日、神戸松蔭女子学院大学）でおこなった口頭発表の内容、ならびに平成13-14年度科学研究費基盤研究C（2）「時間表現・空間表現の意味の構造化に関する日本語と中国語の対照研究」（課題番号:13610676、代表者:井上優）の成果報告書（2003年3月）に掲載した「パーフェクトの「(モウ)シタ」について」の内容を大幅に改訂して公刊するものである。

II 現在からきりはなされた過去（アオリスト的）

(4) a. 父はこの間の伊豆の地震で死にました。（日本沈没）

b. 古賀さんは、一昨年十月に引っ越しましたよ。（新幹線大爆破）

(以上、鈴木 1979: 49)

シタの用法が大きくシタ I とシタ II のように分かれることは、研究者の共通認識となっていてよい。しかし、両者の関係については 2 つの異なる見方がある（金水（2000: 54-57）の議論も参照）。

第一の見方は、シタは二義的とまでは言えないとする見方である。鈴木（1979）は、シタは「過去の特定の一つの時間にその動きや変化がまるごと現実の時間に関係づけられる」（鈴木 1979: 41）ことを表す完成相過去の形式であり、シタ I とシタ II の違いは共起要素や文脈により生ずるニュアンスの違いにすぎないとする。

第二の見方は、シタは二義的であるとする見方である。寺村（1984: 119-122）は、シタ II は出来事を「現在から切りはなされた、過ぎ去った点」として表し（単なる過去）、シタ I は「ある時点において、ある（幅をもつ）事態が既に実現した」ことを表す（現在における既然）とする（寺村 1971 ではそれぞれ「過去」「完了」）。工藤（1995: 128-146）は、シタ II は完成相過去、シタ I はパーフェクト相現在、すなわち過去の出来事の結果・効力が現在存在することを表すとする。丹羽（1996: 24-31）は、スル・シタは〈動きの実現〉というアスペクト的意味を有し、シタ II は「過去における実現」、シタ I は「過去における実現、かつ現在の実現済みの状態」を表すとする。これらの研究はそれぞれテンス・アスペクト体系のとらえ方が異なるため、「現在における既然」、「パーフェクト相現在」、「過去における実現、かつ現在の実現済みの状態」という説明の意味あいも異なる。丹羽（1996）の見方は、シタ I とシタ II は「過去における実現」の意味を共有すると見る点で、鈴木（1979）の見方に近いところもある。しかし、シタ I、特にシタ Ic が「朝食は（もう）すんでいる」のような実現済みを表すパーフェクト相現在のシテイルと類似の意味を表すと見る点では、これらの研究は同じ見方に立つと言ってよい。ここでは議論の便宜上、これらの研究を「シタ Ic はパーフェクト相現在を表す」と見る研究としてまとめる。

鈴木（1979）は、この第二の見方、特にシタ Ic に対する寺村（1971）の議論について次のように述べている（本論の議論と直接関係する内容のみ引用。例文の体裁を一部変更）。

（注）寺村秀夫 1971 はわたしのあげた第三の変種 [井上注: シタ Ic] に相当するものを「完了」とよび、第四の変種 [井上注: シタ II] に相当するものを「過去」とよんで、終止的な「タ」に二つの（文法的な）意味をみとめている。そして、前者をアスペクトの意味、後者をテンスの意味だとしている。しかし、これには疑問がある。

(略)

寺村は、この二つが別の意味であることを、対応する否定の形のちがいにもとめている。

[7] モウ昼飯ヲタベタカ

[7] イヤ、(マダ) 食ベテイナイ／食ベナイ。(×食ベナカッタ)

[8] キノウ昼飯ヲタベタカ

[8'] イヤ, 食ベナカッタ。(×食ベテイナイ／食ベナイ)

この事実の指摘は重要だが、これだけでこの二つのばあいの「タ」をそれぞれ独立の意味とみることはまだできないだろう。

もしこれを別の意味であるとするなら、こうした文脈のない、単なる

[4] 昼飯ヲ食ベタ

はどうであるのか？ 寺村はこれは、《すくなくとも二義的である》という。

わたしは、このようなばあいは、二義的ではなく、単なる過去（アクチュアルな過去）であるとみとめるべきだとかんがえる。二義的ということは ambiguity が生じているということであるが、この文のテンス的、アスペクト的な意味は明確である。ただ、ペルフェクト的なニュアンス、アオリスト的なニュアンスはついていないのだとかんがえる。つまり、[7]と[8]のちがいは、独立の文法的な意味の、文脈、場面、話し手の予期のあるなしなどによって生じるニュアンスのちがいであるとかんがえるのである。（鈴木 1979: 51-52）

寺村（1971）に限らず、シタの二義性を認める場合は、「シタ II - シナカッタ」、*「シタ Ic - シテイナイ」*という対応する否定形式の違いが重要な根拠とされる。また、その場合、対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算するという論法が前提となっていると見られる。

- (1) 「シタ Ic - シテイナイ」という対応におけるシテイナイは、パーフェクト相現在のシテイルの否定形式である。よって、シタ Ic は、パーフェクト相現在のシテイルと同様、パーフェクト相現在を表す。

この論法は一見自然なものに見える。しかし、この論法は、以下の4つの理由により、適切とは言えないところがある。

- 1) 「シタ Ic はパーフェクト相現在を表す」という説明は、シタの意味に関する素朴な直感と必ずしも合致しない。
- 2) 対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算するという論法は妥当ではない。
- 3) 「シタ Ic - シテイナイ」という対応は、直接の対立関係にない肯定形式と否定形式が一定の文脈的条件のもとで対をなす「見かけ上の対立」にすぎず、シタ Ic の体系上の位置づけを考える手がかりにはならない。
- 4) 「シタ Ic - シテイナイ」という対応が成立する直接の原因は、シタ Ic のパーフェクト性ではなく、日本語のシタが有する「出来事全体をその前後を含む時間の流れの中に位置づける」という意味的性質（動的叙述性）である。

以下、第2節から第5節で上記の4点について論ずる。それにより、シタの意味と「シタ Ic - シテイナイ」という対応の背景について考えることが本論の目的である。シタ Ia とシタ Ib についても鈴木（1979）の見方がより適切と考えるが、本論では直接の考察対象とはしない。

2. シタの意味に関する直感的な議論

まず、先の (1) の説明はシタの意味に関する素朴な直感と合致しないことを述べる。

- (2) 朝食は (もう) 食べている。(パーフェクト相現在のシテイル)
- (3) 「朝食は (もう) 食べた?」「うん, (もう) 食べた。」(シタ Ic)
- (4) 「昨日は朝食を食べた?」「うん, (昨日は) 食べた。」(シタ II)

直感的に考えれば、パーフェクト相現在のシテイルを用いた (2) が表すのは「現在は出来事が実現済みの状態にある」ということである。一方、シタ Ic を用いた (3) とシタ II を用いた (4) が表すのは、いずれも実現済みの状態の存在というよりは、発話時以前における出来事の実現である。(3) の「もう食べた」と (4) の「昨日は食べた」の意味は異なるが、その違いは、前者が「(発話時以後ではなく) 発話時以前に出来事が実現された」という出来事実現のタイミングのずれを述べる文であるのに対し、後者は「発話時以前に (出来事が実現されずに終わったのではなく) 出来事が実現された」という発話時以前における出来事実現の有無を述べる文であるという違いである。シテイルとシタ (シタ Ic, シタ II) の意味の違いは述語レベルの違いだが、シタ Ic とシタ II の意味の違いは、出来事実現のタイミング、出来事実現の有無のいずれを問題にするかという文レベルの違い (鈴木 1979 の言い方を借りればニュアンスの違い) である。

出来事実現の有無を述べるか、出来事実現のタイミングを述べるかということは、出来事時が特定されているかどうかとは別レベルの問題である。次の例では出来事時を表す要素の有無に関係なく、出来事実現の有無を述べる文、出来事実現のタイミングを述べる文の両方になりうる。

- (5) 朝食は食べた。
 - a. 朝食は (発話時以前に食べたか食べなかったかと言うと) (ある時に) 食べた。
 - b. 朝食は (発話時以後ではなく発話時以前のある時に) (もう) 食べた。
- (6) 朝食は 5 時に食べた。
 - a. 朝食は (発話時以前に食べたか食べなかったかと言うと) 5 時に食べた。
 - b. 朝食は (発話時以後ではなく発話時以前の) 5 時に (もう) 食べた。

(5a, b) と (6a, b) の違いは、出来事時が不定か (例 5a, b)、特定されているか (例 6a, b) という違いである。また、(5a, 6a) と (5b, 6b) の違いは、出来事実現の有無を述べるか (例 5a, 6a)、出来事実現のタイミングを述べるか (例 5b, 6b) という違いである。いずれの場合も、「食べた」という述語自体は、発話時以前における出来事の実現を表すと考えるのが自然である。

「発話時以後ではなく発話時以前に」ということを述べる背景には、発話時が当該の出来事の実現想定区間内にあるということがあがる (井上 2001: 125-136)。実際、発話時が当該の出来事の実現想定区間内にはない場合はシタ Ic の使用は不自然である。シタ Ic に感じられる「現在との結びつき」もそのことを指していると思われる。

- (7) (朝 8 時ごろに)

「朝食は食べましたか?」「もう食べました。」

(8) (その日の夕方に)

「今日は朝食を食べましたか?」「# もう食べました。」

(「#」は当該文脈での使用が不自然であることを表す。)

3. 「対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算する」という論法は妥当か

前節の議論はあくまで直感的な議論である。もし先の (1) の論法が前節の直感的な議論をしりぞけるだけの説得力を持つならば、シタ Ic はパーフェクト相現在を表すと考えるべきである。しかし、(1) の論法は先の 2) から 4) にあげた理由により、適切ではないと考える。本節では、(1) のように対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算するという論法は妥当ではないことについて述べる。

対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算するという論法は、次の 2 つの論法から構成される。

① 同じ肯定形式が 2 つの否定形式に対応する場合、その肯定形式は二義的である。(シタ Ic とシタ II は対応する否定形式が異なる。よって、シタ Ic とシタ II は意味が異なる。)

② 同じ否定形式に対応する肯定形式が 2 つある場合、その 2 つの肯定形式は基本的に同義である。(シタ Ic に対応する否定形式シテイナイはパーフェクト相現在シテイルの否定形式である。よって、シテイナイに対応する肯定形式シタ Ic もパーフェクト相現在を表す。)

しかし、①と②はいずれも一般論としては成立しない。まず①について見る。

(9) (井上から乙に連絡が来ることになっている)

甲：井上さんから (もう) 連絡来た?

乙：a. まだ来ません。

b. まだ来ていません。

「(もう) 連絡来た?」という問いに対しては、「まだ来ない」とも「まだ来ていない」とも答えることができる。この場合、「まだ来ない」は「現在まだ来る様子がない」という意味(尾崎 2000 のいう現在用法のシナイ)を表し、「まだ来ていない」は「現在まだ来た結果がない」という意味を表すというように、2 つの応答の意味は異なる。上記①が正しければ、(9) の「(もう) 連絡来た?」も二義的と考えるべきであるが、そうとは考えにくい。つまり、上記①は一般論としては成立しない。シタ II とシタ Ic の場合、出来事実現の有無を述べるか、出来事実現のタイミングを述べるかという文レベルの意味の違いがある点は (9) と異なるが、異なる否定形式に対応することがただちにシタという述語形式の二義性を意味するわけではないことには変わりはない。

次に②については、完了を表す中国語の動詞接尾辞“了”に関する議論が参考になる。

(10) 他 写了 一封信。(彼は手紙を一通書いた。)

“了”の意味については諸説あるが、刘 (1988) は“了”の意味は「完了」ではなく「実現」

であると主張し、その根拠の1つとして否定形式との対応をあげている。すなわち、“V了”に対応する否定形式は“没(有)V”であり、“没(有)V”が表すのは「未完了」ではなく「未実現」である。したがって、“没(有)V”に対応する肯定形式である“V了”が表すのも「完了」ではなく「実現」であるというわけである。

(11) 他 没(有) 写信。(彼は手紙を書いていない。)(=動作が未実現)

しかし、木村(1997:162)も指摘するように、この議論は正しくない。なぜなら、“没(有)V”は維持を表す“V着”の否定も表すからである。

(12) a. 他 写着 信 呢。(彼は手紙を書いている。)

b. 他 没(有) 写信。(彼は手紙を書いていない。)

もし同じ否定形式に対応する肯定形式は基本的に同義であるとする、“V了”(完了)と“V着”(維持)は基本的に同義ということになるが、これは事実と反する。つまり、先の②は一般論としては成立しない。中国語の場合、「完了」と「維持」は出来事の実現のあり方は異なるが、出来事の実現である点では共通するため、いずれの否定も“没(有)V”になると考えられる。

日本語の場合も、シタIcに対応する否定形式がパーフェクト相現在のシテイルの否定形式であるシテイナイになることは、ただちにシタIcがパーフェクト相現在を表すことを意味するわけではない。次節では、「シタIc - シテイナイ」という対応は、シタIcの意味によるものというよりは、シタIcが用いられるタイミングによるものであることを見る。

4. 肯定-否定における「体系上の対立」と「見かけ上の対立」

「シタIc - シテイナイ」という対応を根拠としてシタIcがパーフェクト相現在を表すということを主張する場合、次のことが前提となっていると見られる。

(13) パーフェクト相現在の「シテイル - シテイナイ」は形態的にも意味的にも対立関係にある。一方、「シタIc - シテイナイ」は、形態的には対立関係にないが、意味的にはパーフェクト相現在の「シテイル - シテイナイ」と同等の対立関係にある。

しかし、実際には、「シタIc - シテイナイ」はパーフェクト相現在の「シテイル - シテイナイ」と同等の対立関係にはないと見られる。

一般に、肯定形式と否定形式の対応には、1) 体系上直接の対立関係にあるものと、2) 体系上は直接対立しないが文脈上対をなして用いられる(見かけ上対立しているように見える)ものがある。たとえば、次の例を見られたい。

(14) (東北新幹線「はやぶさ」の一番列車の発車のチャイムが鳴り終わった)

a. (「はやぶさ」が動き始めた)

お、動いた。

b. (「はやぶさ」は動く様子がない)

あれ, 動かないぞ (# 動いていないぞ, # 動かなかったぞ)。

(14b) の文脈では、「動いていない」「動かなかった」はいずれも不自然であり、「動いた-動かない」という対応が成立する。しかし、この対応は、直接の対立関係にない肯定形式と否定形式が文脈上対をなしているにすぎない。実際、(14b) の「動かない」は「動く様子が現在ない」ことを表す現在用法のシナイだが、これと直接対立するのは「動いた」ではなく、「動く様子が現在ある」ことを表す (15) のような「動く」である。

(15) (「はやぶさ」の発車のチャイムが鳴り終わり, ドアが閉まった)

さあ, 動くぞ。

「出来事が実現される様子が現在ある」ことを表すスルと「出来事が実現される様子が現在ない」ことを表す現在用法のシナイとは形態的にも意味的にも直接の対立関係にあるが、両者は発されるタイミングが異なる。「出来事が実現される様子が現在ある」ことを表すスルは出来事実現のタイミングの前に発されるが、「出来事実現のタイミングなのに出来事が実現される様子がない」ことを表す現在用法のシナイは、シタと同様、出来事実現のタイミングの後に発される。そのため、(14) のように発話時が出来事実現のタイミングの後である場合は、「動く」と現在用法の「動かない」は文脈上の対をなさない。

(14a) の「動いた」は「発話時以前 (具体的には発話時直前) に出来事の実現があった」ことを表すが、それと直接対立する否定形式は「発話時以前には出来事の実現はなかった (実現されずに終わった)」ことを表す「動かなかった」である。次の (16) のような文脈では両者が文脈上も対をなす。

(16) (ドアが閉まって何秒で新幹線が動き始めるか賭けをしている。話し手は「3秒以内で動く」、聞き手は「3秒以内では動かない」と主張している)

a. (ドアが閉まって3秒以内に動き始めた)

お, (3秒以内に) 動いた。

b. (ドアが閉まって3秒以内には動かず)

しまった, (3秒以内には) 動かなかった。

これに対し、先の (14b) では、話し手は発話時においても「新幹線が動くかどうか」を問題にしており、そのようなタイミングで「動かなかった」を用いて「出来事が実現されずに終わった」ということを述べるのは不自然である。よって、(14b) では「動いた」と「動かなかった」は文脈上の対をなさない。

さらに、(14b) の文脈では「動いていない」も使えない。それは、次の (17) の文脈で「沸いている」が不自然なのと同じ理由による。

(17) (お湯が沸くのを今か今かと待っていたところ, 眼前で沸騰状態に達した)

よし, 沸いた (# 沸いてる)。

(17) のように、発話現場において出来事が実現されるかどうか注目している文脈では、その場で生じた結果状態をいきなりシテイルで叙述するのは不自然である。同様に、(14b) の文脈では話し手は発話現場において「新幹線が動くかどうか」に注目しており、その場で生じた状態をいきなり「動いていない」で叙述するのは不自然である (黄 2000: 340-341)。

以上のような理由で、(14) の文脈では、「動く - 動かない (現在用法)」、 「動いた - 動かなかった」、 「動いた - 動いていない」という対応は成立せず、「動いた - 動かない (現在用法)」という対応のみが成立する。直接の対立関係にない肯定形式と否定形式が一定の文脈的条件のもとで見かけ上の対立をなすわけである。

「シタ Ic - シテイナイ」という対応も、これと同じく、体系上は直接対立しない肯定形式と否定形式が文脈上対をなすものと見られる。

(18) (ある件について明日までに決着をつけないといけない)

甲：例の件、決着はついた？

乙：a. はい、(もう) つきました。

b. いいえ、(まだ) ついていません / つきません (#つきませんでした)。

「決着はついていない」が表すのは「決着済みの状態が現在存在しない」という現在のことがらであり、これと直接対応するのは「決着済みの状態が現在存在する」ことを表す「決着がついている」である。

(19) a. 例の件は (現在) もう決着がついている。

b. 例の件は (現在) まだ決着がついていない。

一方、「(もう) 決着がついた」が表すのは「(発話時以後ではなく) 発話時以前に出来事の実現があった」ということであり、これと直接対立するのは「発話時以前には出来事の実現はなかった (発話時以後となった)」ことを表す「(まだ) 決着はつかなかった」である。

(20) a. 例の件は (発話時以前, 具体的には) 先ほどの投票でもう決着がついた。

b. 例の件は (発話時以前, 具体的には) 先ほどの投票ではまだ決着がつかなかった。

しかるに、(18b) では、先の (14b) と同じく、話し手は発話時においても「明日までに決着がつくかどうか」を問題にしており、そのようなタイミングで「決着がつかなかった」を用いて「出来事が実現されずに終わった」ということを述べるのは不自然である。そのため、(18b) では「決着はつかなかった」は使えず、「決着済みの状態が現在存在しない」ことを表す「決着はついていない」、あるいは「決着がつく様子が現在ない」ことを表す現在用法の「決着はつかない」が文脈上の対をなすことになる。

このように、「シタ Ic - シテイナイ」という対応は、体系上は直接対立しない肯定形式と否定形式が文脈上対をなすものである。このような見かけ上の対立をもとにシタ Ic の体系上の位置づけを考える、たとえばシタ Ic はパーフェクト相現在を表すとすることは妥当とは言えない。

5. シタの動的叙述性とシナカッタの意味

前節で見たように、シタ Ic とシナカッタの対立は常に文脈上の対応に反映されるわけではない。文脈上はむしろ「シタ Ic - シテイナイ」という対応が成立する方が多い。

先行研究では、「シタ Ic - シテイナイ」という対応はシタ Ic のパーフェクト性を反映したものとされる。たとえば、工藤 (1996: 90) は、通時的な観点から「シテイル形式のみならずシタ形式が、『シタリ』に連続する歴史的残存物としての〈現在パーフェクト (パーフェクト相現在)〉用法を保持している」と述べている。しかし、共時的に考えた場合は、「シタ Ic - シテイナイ」という文脈上の対応が成立する直接の原因は、シナカッタが「発話時以前には出来事が実現されずに終わった」ことを表すためと考えるのが自然である。すなわち、シタは出来事が実現されれば使えるのに対し、シナカッタは出来事が実現されずに終わったことが確定しないと使えないということである。

シナカッタが「発話時以前には出来事が実現されずに終わった」という意味を表す背景には、日本語のシタの意味的性質が密接に関係している。井上・生越・木村 (2002: 135-144) では、韓国語の hayssta (シタ) が発話時以前における出来事存在を述べるだけの表現であるのに対し、日本語のシタは「出来事全体をその前後を含む時間の流れの中で位置づける」という「動的叙述性」がきわめて明確であることを述べた。

(21) (夜遅く酔っぱらって帰ってきた夫に妻が)

a. こんな遅くまで、何やってたの (# やったの) ?

b. ile-n nuc-un sikan-kkaci, mwe hayss-eyo?

こんな 遅い 時間-まで 何 やりました

(22) (外に遊びにっていた子供が服を泥だらけにして帰ってきた)

あんた、何やったの?

(以上、井上・生越・木村 2002: 135)

日本語では、(21) のように、帰宅するまでの間なされた動作の内容を問う場合は「やった」は不自然だが、(22) のように、「何かやった→服が泥だらけになった」という時間の流れにそった因果関係を問題にする場合は、「やった」が自然になる。韓国語の hayssta はいずれの場合でも自然である。次の例についても同じである。

(23) a. 日本に来られる前は、何をされましたか?

b. ilpon-ey o-si-ki cen-ey-nun, mwues-ul hasyess-supnikka?

日本-に 来られる 前-には 何-を されましたか

(井上・生越・木村 2002: 135)

日本語文 (23a) は、来日までの経過 (経歴または来日準備過程) を問う文であり、来日直前まで従事した職業を問う文としては使いにくい (その場合は「何をしていましたか?」のように継続形を用いる)。これに対し、韓国語文 (23b) は、時間の流れにそった経過を問題にするという意味は特になく、来日直前まで従事した職業を問う文としても使える。過去の動作であれば、

来日までの経過としての動作か、来日前まで継続された動作であるかは問題にならない。(23)の文に答える場合も同じである。

(24) (来日直前まで従事した職業を述べる)

a. 大学で日本語を教えていました (# 教えました)。

b. tayhak-eyse ilpone-lul kaluchyess-supnita.

大学-で 日本語-を 教えました

(井上・生越・木村 2002: 136)

次の(25)のように、話し手が動作の断片しか把握しておらず、時間の流れにそった全体の経過を把握していない場合もシタは使いにくい。類似の状況でシタを用いるためには、(26)のように、出来事全体がより大きな時間の流れの中で位置づけられる必要がある。韓国語では、(25)の文脈でも hayssta が自然に使える。

(25) (話し手が会議室に行ったところ、先に来ていた A 氏が窓から外を見ているのが見えた。

ほどなくして A 氏が外を見るのをやめたところで)

a. 何を # 見たんですか / 見てたんですか?

b. mewl pwass-eyo / po-ko iss-ess-eyo?

何を 見ました 見て いました

(井上・生越・木村 2002: 136)

(26) (A 氏は会議前に必ず窓から外を眺める。今日も話し手が会議室に行くと、A 氏が窓から外を見ていた。ほどなくして A 氏が外を見るのをやめたところで)

今日は何を見たんですか?

(井上・生越・木村 2002: 137)

日本語では、記録や痕跡はあるが実現の経過がイメージできない過去の出来事はシタでは述べられないが、これもシタに「出来事全体をその前後を含む時間の流れの中で位置づける」という意味が明確であることの反映である。この場合、日本語ではパーフェクト相現在のシテイルを用いる必要がある。

(27) 甲：乙さん、先月『対照言語学入門』という本を注文されましたよね。

乙：え？ そんな本注文したっけ？

甲：(注文用ハガキを見せて) これ、乙さんの字ですよ。

乙：(ハガキを見せられたが、注文の経過を思い出せない)

本当だ。確かに先月注文してるねえ (# 注文したねえ)。

cwumwun-hayss-ney.

注文-した-気づき

(注文した経過を思い出した)

あ、そういえば、何かそんなタイトルの本を注文したなあ

cwumwun-hayss-ess-ci.

注文-した(大過去)-気づき

(井上・生越・木村 2002: 143)

(28) (近づいてきた見知らぬ人が酒臭いの気づいて横の友達に)

a. お酒飲んでる (# 飲んだ)。

b. swul masyessta.

酒 飲んだ

(生越 1995: 199)

韓国語の hayssta は発話時以前における出来事の状態を述べるだけの形式であり, (27), (28) のように実現の経過がイメージできない過去の出来事を述べる場合でも使用可能である。韓国語のシテイル相当形式はパーフェクトの用法を持たないが, それも hayssta の使用範囲が日本語のシタよりも広いからである。

否定に関しても日本語と韓国語は違いを見せる。すでに見てきたように, 日本語のシナカッタは「発話時以前には出来事が実現されずに終わった」ことを表し, その結果「昨日来た」と「もう来た」とでは文脈上対応する否定形式が異なる。一方, 韓国語では, hayssta の否定形 an hayssta (an は否定副詞) は発話時以前における出来事の不存在を述べるだけであり, 「昨日来た」「もう来た」に対応する否定形式はいずれも an wass-e (直訳「来なかった」) となる。

(29) a. 昨日田中さん来た? いや, 来なかった。

b. ecey, tanakha-ssi wass-e? ani, an wass-e.

昨日 田中-氏 来た いや 否定 来た

(30) a. 田中さん (もう) 来た? いや, まだ来ていない。

b. tanakha-ssi wass-e? ani, acik an wass-e.

田中-氏 来た いや まだ 否定 来た

(以上, 井上・生越・木村 2002: 141)

韓国語の hayssta は発話時以前における出来事の状態を表すだけであり, それと直接対応する否定形式である an hayssta も発話時以前における出来事の不存在を述べるだけである。一方, 日本語のシタは「出来事全体をその前後を含む時間の流れの中で位置づける」という動的叙述性が強いので, 直接対立する否定形式であるシナカッタも「出来事が実現されなかった過程をその前後を含む時間の流れの中で位置づける」という意味, すなわち「発話時以前には出来事が実現されずに終わった」ことを表す。

シタの動的叙述性は, 出来事の実現済みの状態 (出来事の結果・効力) をとらえるパーフェクト性よりは, 出来事を1つのまとまりとして提示する完成性と密接に関係するものである。動的叙述性とは「出来事を1つのまとまりとしてとらえることを時間の流れにそった形でおこなう」ことだと考えられるからである。その意味で, 「シタ Ic - シテイナイ」という文脈上の対応は, シタ Ic のパーフェクト性の反映というよりは, 日本語のシタの動的叙述性の強さの反映と考えるのが自然である。

6. 完成性とパーフェクト性の位置づけ

以上, 「シタ Ic - シテイナイ」という対応から「シタ Ic はパーフェクト相現在を表す」とい

う結論を導くことは、以下の4つの理由により、適切とは言えないことを述べた。

- 1) 「シタ Ic はパーフェクト相現在を表す」という説明は、シタの意味に関する素朴な直感と必ずしも合致しない。
- 2) 対応する否定形式の意味から肯定形式の意味を逆算するという論法は妥当ではない。
- 3) 「シタ Ic - シテイナイ」という対応は、直接の対立関係にない肯定形式と否定形式が一定の文脈的条件のもとで対をなす「見かけ上の対立」にすぎず、シタ Ic の体系上の位置づけを考える手がかりにはならない。
- 4) 「シタ Ic - シテイナイ」という対応が成立する直接の原因は、シタ Ic のパーフェクト性ではなく、日本語のシタが有する「出来事全体をその前後を含む時間の流れの中に位置づける」という意味的性質（動的叙述性）である。

このような見方に立つかぎり、シタ Ic とシタ II については、第1節で述べたように、ともに発話時以前における出来事の実現を表し、両者の違いは出来事実現のタイミング、出来事実現の有無のいずれを問題にするかという文レベルの違いと考えるのが自然である。パーフェクト相現在のシテイルのパーフェクト性は、出来事が実現済みの状態にある（出来事の結果・効力が存在する）ことを述語レベルで述べるものだが、シタ Ic のパーフェクト性は、発話時が当該の出来事の実現想定区間内にあるという疑似的なものにすぎない。

出来事を1つのまとまりとしてとらえる完成性は、無標の述語形式という形態と密接に結びついた概念であると見られる。日本語のスルは基本的に現在の出来事を表さないが、韓国語の hanta (スル) は現在の出来事を表しうるといように、無標の述語形式の意味範囲は言語によって異なる。しかし、この違いは本論で述べた動的叙述性の強弱により生ずるものであり、スルと hanta 自体は出来事を1つのまとまりとして叙述する形式であると考え（井上（近刊））。

これに対し、出来事の実現済みの状態（出来事の結果・効力）をとらえるパーフェクト性は、さまざまな手段により直接的・間接的に表現することが可能であると見られる。たとえば、英語の現在完了形は当該の事象が過去と現在の両方にまたがって存在することを表す。(32) のように動的述語で用いられた場合は、過去の出来事の結果が状態や経歴の形で現在存在することを表すことになる。

(31) I *have lived* in London since 1980. (私は1980年以来ロンドンに住んでいる。)

(32) a. The taxi *has arrived*. (タクシーが来ている。)

b. I *have read* the book before. (私はかつてその本を読んだことがある。)

(以上、三原 1997: 110)

「場面の変化」を表す中国語の文末助詞“了”（完了の動詞接尾辞“了”とは別形式）もパーフェクト性を有すると言われることがある (Li and Thompson 1981: 240-290, 望月 1997. Li and Thompson 1981 の用語では Currently Relevant State)。これも、場面の変化を叙述することが「現在は変化後の場面である」という含みにつながるということであり、文末助詞“了”の基本義がパーフェクトであるというわけではない。

(33) (さっきまで降っていなかった雨が降っているのに気づいて)

下雨 了。(雨が降ってきた。)[「降雨なし」場面→「降雨あり」場面]

韓国語の *hayssta* (シタ) も、日本語ではパーフェクトのシテイルが用いられる (27), (28) のような文脈で用いられることがある。しかし、この場合も、*hayssta* は単に発話時以前の出来事 の存在を表すだけであり、出来事が実現済みの状態にある (出来事の結果・効力が存在する) ということ を述べているわけではない。*hayssta* は日本語のシタに比べて動的叙述性が弱いために、使用可能な文脈がシタよりも広いというだけである。

完成性とパーフェクト性に関するこのような見通しが妥当かどうかについて、通時的な観点も加えながら、今後さらに検討することが必要である。

参考文献 (ハングルはローマ字化)

- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』 97-163. 東京: ひつじ書房.
- 井上優 (近刊) 「事態の叙述様式と文法現象—日本語から見た韓国語—」野間秀樹 (編) 『韓国語教育論講座』 東京: くろしお出版.
- 井上優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語—」生越直樹 (編) 『対照言語学』, シリーズ言語科学第 4 巻: 125-159. 東京: 東京大学出版会.
- 木村英樹 (1997) 「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」大河内康憲教授退官記念論文集刊行会 (編) 『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』 157-179. 東京: 東方書店.
- 金水敏 (2000) 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 『時・否定と取り立て』, 日本語の文法第 2 巻: 1-92. 東京: 岩波書店.
- 黄麗華 (2000) 「否定表現の日中対照—「まだ V しない」と「还不 V」—」佐治圭三教授古稀記念論文集編集委員会 (編) 『日本と中国 ことばの梯 佐治圭三教授古稀記念論文集』 335-345. 東京: くろしお出版.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」言語学研究会 (編) 『ことばの科学』 7: 81-136. 東京: むぎ書房.
- Li, Charles and Sandora Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A functional reference grammar*. Berkeley: University of California Press.
- 刘勋宁 (1988) 「現代汉语词尾“了”的语法意义」『中国语文』 1988 年第 5 期: 321-330.
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一『ヴォイスとアスペクト』, 日英語比較選書第 7 巻: 107-186. 東京: 研究社出版.
- 望月圭子 (1997) 「中国語のパーフェクト相」『東京外国語大学論集』 55: 55-71.
- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」『人文研究』 48(10): 703-740. 大阪市立大学文学部.
- 生越直樹 (1995) 「朝鮮語 *hayssta* 形, *hay issta* 形 (*hako issta* 形) と日本語シタ形, シテイル形」国立国語研究所 (編) 『研究報告集』 16: 185-206. 東京: 秀英出版.
- 尾崎奈津 (2000) 「シナイの〈現在〉用法をめぐって—シテイナイとの比較から—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 10: 41-55.
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい—」言語学研究会 (編) 『言語の研究』 5-59. 東京: むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1971) 「「タ」の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ—」『岩倉具実教授退職記念論文集 言語学と日本語問題』 東京: くろしお出版. (寺村 1984: 313-358 に所収)
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 東京: くろしお出版.

On the Ambiguity of the *ta*-Form in Japanese

INOUE Masaru

Reitaku University
Department of Crosslinguistic Studies,
National Institute for Japanese Language and Linguistics [-2011.03]

Abstract

The *ta*-form of dynamic verbs (*V-ta*) has two negative forms: *V-nakatta* 'did not *V*' and *V-tei-nai* 'has not *V*-ed'. This is normally considered as evidence supporting the claim that *V-ta* is semantically ambiguous: *V-ta* whose negative form is *V-nakatta* expresses past perfective, while *V-ta* whose negative form is *V-tei-nai* expresses present perfect. I show that this claim is incorrect for the following reasons. (i) The meaning of *V-ta*, which is said to express present perfect, is different from that of *V-teiru* as a present perfect form in Japanese. (ii) It is implausible to determine the meaning of *V-ta* based on the meaning of the corresponding negative form. (iii) The opposition of *V-ta* (affirmative) / *V-tei-nai* (negative) is realized at a pragmatic or contextual level rather than a semantic or logical level and therefore it cannot be evidence for the semantic ambiguity of *V-ta*. (iv) It is the semantic property of *V-ta* which can be called "high dynamicity of event description" that establishes the contextual opposition between *V-ta* (affirmative) and *V-tei-nai* (negative). The so-called semantic ambiguity of *V-ta* is merely the difference between sentences which specify whether or not the event occurred and those which specify whether or not the event belongs to the past.

Key words: perfect, perfective, *ta*-form, *teiru*-form, dynamicity in event description